

## 会員の死を悼む

立教大学経済学部教授高橋和男先生が、2006年（平成18年）11月27日にご病気のためお亡くなりになりました。享年61歳でした。先生はアメリカ経済史全般に広く精通しておられ、最後までご自身の研究を続けられた傍ら、他の研究者のご指導にも熱心な方でした。先生の的確なアドバイス、コメントに励まされた会員の方も多いと思います。筆者の経験から申せば、ご指摘のアドバイス、コメントは大変厳しいのですが、フォローを予め準備されておいでで、真摯に取り組みばそのフォローへ辿り着くことができるような指導をしてくださいました。

先生は、一貫してアメリカ体制の形成に寄与した経済思想家について研究され、多くの業績を残されました。これに関する最初の御論文「D.A.ウェルズの関税改革と『アメリカ体制』」『立教経済学研究』第35巻第1号、1981年では、建国初期にハミルトンが主張した保護主義論に端を発し、自立的な国民経済の育成、保護を推進しようとしたアメリカの経済思想を包括的に表現した「アメリカ体制」についてどのように捉えていくかが課題であるとお書きになっています。以降、国内外ともに研究が少なく、これまであまり照射されることのなかった、アメリカ体制の形成に貢献した経済思想家について、ヘンリー・ケアリーやダニエル・レイモンドを中心に一次史料を駆使して詳細に分析し、経済思想家それぞれがどのような点で特徴、独自性を有していたかを明らかにされています。例えば、「ケアリーにおける反古典派経済思想の形成」田中敏弘編『アメリカ人の経済思想』日本経済評論社、1999年では、ケアリーは通説とは異なり、フリードリヒ・リストやレイモンドらに理論的根拠を依拠したのではなく、実際にはアダム・スミスに求めていたと主張されました。レイモンドを扱った一連の御論文、「アメリカ国民経済学の成立 —レイモンド『経済学論』における反蓄積論—」『立教経済学研究』第57巻第2号、2003年、続く三編の「アメリカ国民経済学と『レイモンド・リスト問題』」『立教経済学研究』（上）第59巻第2号、2005年、（中）第59巻第4号、2006年、（下）第60巻第1号、2006年では、ほとんど研究されてこなかったか、あるいはリストの国民経済思想との関連で付随的にしか扱われず、著作が吟味されたことがほとんどなかったレイモンドを、レイモンドの著作の側から分析して、時に仏語・独語文献も援用しつつ、通説とは異なり、レイモンドはリストに思想的影響を与えていたと結んでおられます。先生は、研究史上あまり焦点の当てられてこなかった、アメリカ体制に関与した各経済思想家の独自性、特徴に光を当て、資料を丹念に読み込んだ上で、それらに意義づけを行う、あるいは再解釈を行う研究を続けてこれ、その途上で旅立たれたように思います。

少しはにかんだような表情でお話されていた先生を、つい昨日のここのように思い出します。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

（小山久美子）